

「本当にいいから、瀬戸さんってセラピスト！すごい上手で俺も結構通ってるんだ」

職場の先輩にそう熱心に勧められたのは、先週のことだった。日々のデスクワークと、自分を後回しにする性格がたたって、僕の身体は石のように固まっていた。

（僕みたいな地味な人間が、こんな高級ホテルの中にあるスパなんて、場違いだよなぁ……。でも、紹介だし、今日くらいは自分を労わっても……）

場違いな自分に不安を抱えながら訪れたサロンは、美しく静かで、どこか甘い香りが漂っていた。案内された個室は、間接照明が肌を柔らかく照らす、日常から切り離されたような空間だ。

（すごく、いい香り。……なんだか、呼吸するだけで頭がふわふわしてくるみたい）

控えめなノックの音とともに、「失礼します」と静かな声がした。

入ってきたのは、驚くほど顔立ちが整った男性だった。芸能人にいそうな、爽やかで優しい微笑み。

「本日担当させていただきます瀬戸です。よろしくお願いしますね、木内さん」

「あ、よ、よろしくお願いします……！」

「はい、よろしくお願いしますね」

瀬戸さんの声は、耳に心地よく響いた。その場の空気を一瞬で穏やかに変えてしまうような、不思議な安心感。

「事前のご要望では肩を中心とのことでしたが、まずは全身のバランスを見させていただきますね」

「あ、はい……！」

「ではお着替え、あちらでどうぞ」

瀬戸さんの物腰はどこまでもプロフェッショナル

で、僕の緊張を否定せず、ただ優しく受け流してくれる。促されるまま更衣室に入ったけれど、用意されていたのは、紙でできたころもとなない下着一枚だった。

（う、嘘……。僕、普通の男の人とは、身体のが少し違うのに……っ）

人口の約15～17%にあたるカントボーイとして生まれたこの身体は、胸も股の間も、男性のものとは違う繊細な機能を備えている。

（ど、どうしよう。サイトで見た時はバスローブを貸してくれる、って書いてあったから、てっきり……）

「木内さん、お着替え大丈夫そうですか？」

「あ、えっと、あの……すみません、バスローブってお借りできますか？」

「……申し訳ありません。実は洗濯が業者の都合で遅れていて、今あるバスローブはすべて女性の方が

使われているんです」

「あ、そ、そうなんですか……」

「残り一枚もこの後来る女性の方が使用される予定で……何か問題ございましたか？」

カーテン越しに聞こえる瀬戸さんにそう聞かれ、僕は言葉をつぐんだ。

さすがに女性に渡すバスローブを横から搔っ攫うなんて真似はできない。

「あの、実は僕、カントボーイで……っ」

「そうでしたか……ご配慮が届かずすみません。上
の下着もお持ちいたしますか？」

それって、ブラということになるのだろうか。

(ブラなんてつけたことないのに！)

「い、いえ、大丈夫です……！」

と慌てて返事をして、僕は腕で自分を隠すように

して施術台へ向かった。

（プロの人なんだから、変な目で見たりしないはず。
僕が自意識過剰なだけなんだ……）

うつ伏せになって目を閉じると、瀬戸さんの温かい手のひらが、肩にそっと置かれた。

「緊張、してますね。伝わってますよ。……でも、大丈夫。僕に全部、預けてください」

オイルが肌に広がる。ぬちゅり、という粘り気のある音が、静かな部屋でやけに艶めかしく響いた。

大きな手が背中をゆっくりと滑る。その触れ方は驚くほど丁寧で、僕の強張った筋肉を一つずつ解いていく。

「ん、あ……っ」

「そう、力抜いて。……身体、すごく素直ですね。いい反応です」

瀬戸さんの言葉は「施術」としての評価でしかないはずなのに、褒められているような錯覚に陥る。じわじわと身体が熱くなり、意識が微睡みの中に溶けていった。

「次は、前側も流しましょうか。仰向けになれますか？」

自然な促しに、僕は断る理由を見つけられないまま、身体を反転させた。天井の光が眩しくて、思わず腕で顔を覆う。

「失礼しますね。リンパの滞りを取っていきます」

瀬戸さんの指先が、首筋から鎖骨、そして脇腹へと滑り降りる。不意に指の腹が胸の端を、すりっ♡と掠めた。

「っ……あ、んっ」

「痛かったですか？」

「あ、いえ……痛くは、ないです……」

「なら良かったです。ここ、老廃物が溜まりやすいんですよ」

瀬戸さんは表情一つ変えず、当然の処置であるかのように、何度も胸の際を、ぬるぬるっ♡ すりすりっ♡ と撫で上げていく。

女性よりは薄いけれど、男性よりは厚みのある胸が、彼の指が通るたびにきゅんっと疼き、だんだんとおまんこが熱を帯びていくのがわかった。

（これ、さっきから、おっぱいの近くが……。でも、瀬戸さんはあんなに真面目な顔をしてるし……）

「またオイル足しますね。……少し、深く触りますよ」

とろり。

ぬりゅり♡ぬりゅり♡

たっぷりとしたオイルとともに、瀬戸さんの両手が、僕の胸を包み込んだ。